様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月２９日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2010～2012
課題番号：22653095
研究課題名（和文）　ライフレビューによる高齢期学習プログラムの開発と生涯発達過程の分析
研究課題名（英文）　Development of Learning program for elderlies and analysis on lifelong development process through ‘Life Review’ approach
研究代表者
石井山　竜平（ISHIIYAMA RYUHEI）
東北大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：30304702

研究成果の概要（和文）：
本研究は、高齢者を対象に、「いま語りたいこと」をそれぞれが披露しあい、その言葉を互いに鍛えあう、という内容の学習事業を試験的に開講し、そこでの語りや、書かれた自分史（自分誌）をとおして、高齢期の学習特性と、そこに有効な学習支援策を探ろうとする、アクションリサーチである。
事業は、2010～11 年度においては、仙台市の地域社会教育施設の一講座として、2012 年度には、東北大学加齢医学研究所スマート・エイジング・カレッジの一環として取り組まれ、「学び手から語り手へ」誘う過程、経験や蓄積を「仲間」に広げる過程で何が起こるのかが把握され、分析された。

研究成果の概要（英文）：
This study is, with focus on elderly population in Japan, an action research to identify learning tendencies and characteristics in older age and so find out effective strategies on learning support for them. Its process are; 1) implement experimental learning course where individual learner shared what ‘things now　they would like to talk’ and 2) discuss mutually to improve their wordings, and 3) write individual own life history.
The program was first implemented in a course of local social education facility in Sendai City from 2010-2011, and included in the course of ‘Smart Aging Collage’ under the Institute of Development, Aging and Cancer, Tohoku University in 2012. In these experimentally programs, it was identified that learners can be changing into be narrators in the learning process. Also it was examined how it was transferred individual experience and knowledge to their ‘colleagues’, and what has been happening in the process.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	600,000	0	600,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	2,600,000	600,000	3,200,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：社会教育、成人教育、生涯学習、生涯発達、自分史、生活史、高齢者教育

１．研究開始当初の背景

東北大学では、加齢をめぐるインフォーマルな研究交流が研究科横断的に組織され、より豊かに年を重ねていくことをいかに支援するかをめぐって、学際的な研究協議が重ねられてきている。

こうした議論を教育学研究科としていかに継承し、発展させるかを検討しようと、2009 年より、教育学研究科内で専門の異なる教員有志がつながり、「生涯発達と成人教育」研究会を開始し、定例での検討会議と、関連研究者を招聘しての学習会を開催するなか、おおよそ以下のことがらを確認してきた。

一つは、近年の脳科学では、加齢による「衰退」の側面をどう食い止めるか、との視点からの学習プログラム開発がさかんに取り組まれているが、生涯発達心理学では、加齢は必ずしも衰退ばかりをもたらしておらず、むしろ加齢によって獲得される能力があり、発達とはそうした「喪失」と「獲得」の混じりあったダイナミズムである、との生涯発達観が構築されている、ということである。高齢期の発達をどのように測定するか、という課題をめぐっては未開拓の余地が大きいが、老年期における能力の獲得・喪失に大きな影響を与える重要なファクターが「非標準的な生活経験の持ち方」であることまでは判明している。

二つには、近年開発されている高齢者向けの学習プログラムの多くが、いわば、あてがわれたメニューを受動的にこなす、というスタイルのものであるなか、「行為の主体性」に重きをおいた学問である教育学においては、そうした枠組みに限定されない学習方法がさまざま試行されてきていることの確認である。

こうした議論の延長に、学習者それぞれが積み重ねてきた生き様を軸にした学習方法として、「生い立ち学習」、「生活史学習」などといったかたちで取り組まれてきた学習方法を積極的に引き継ぎ、今日的に展開させていくことが、調査方法上においても、学習方法上においても、大きな可能性と意義をもつのでは、との思いに至った。これは、心理臨床において「治療」方法として活用されてきたライフレビューを、学習方法として継承、発展させていくという課題ともいえる。

こうした確認のもと、2009 年度には、仙台市青葉区片平市民センターにご協力いただき、半期 10 回にわたる講座を実験的に開講した（その記録は『臥竜梅 第 1 号』(2010 年 3 月、全 77 頁）として発行)。こうした大学内での議論の積み重ねと、社会教育現場との協働の実績をふまえ、アクションリサーチとしてのライフレビュー講座の翌年度以降の本格実施を計画。その積み重ねによって、①高齢期の発達の測定方法の再検討、②社会教育事業としてのライフレビュー学習の理論と方法の整理、を目指した。

２．研究の目的

この講座で私たちが目指したのは、指導者から知識や技術を教授される一般的な学習スタイルとは異なり、「私」という主語から始まる言葉を互いに聞かせあい、鍛えあうことで、互いの存在を財産にしあう（「私」を「私たち」にしていく）とともに、自己理解を深め、社会観・歴史観を鍛えていく学習方法である。

様々に高齢者むけの学習プログラムの開発が著しい昨今であるが、ここでは、そうした取り組みにみられる、いわば「あてがわれた内容をこなす」学びとは異なり、学習者一人ひとりにとってはきわめて大事ではありながら、表面化されることのあまりない情報が流通する場を創りだすことを目指したものであった。

そこでは、先に指摘した「非標準的な生活経験の持ち方」に関わる情報、すなわち、学習者一人ひとりの成り立ちにとってはきわめて大事ではあるけれども、表面化されることの乏しい情報が流通する場となる。

こうした内容をもつ学習機会は、かつては高度経済成長期、青年を対象とした社会教育実践のなかでさかんに取り組まれてきたが、今日の社会教育実践ではごく一部でしか展開されていない。このような学習事業を、調査方法として活用するとともに、今日に有効な学習方法としてブラッシュアップしようとする点に、本研究の目的と意義がある。

３．研究の方法

上述したねらいに加えて、本調査の特徴としてあげられるのは、第一に、実際の社会教育施設で実現可能な学習プログラム開発を目指した点である。実施されたライフレビュー講座は、研究費助成を受ける前年度にあたる 2009 年度から仙台市片平市民センターの主催事業として実験的に開始している点からもいえるように、あくまで現実の社会教育の現場で実施可能なやり方を追求することにこだわった。研究者と現場職員が協働で講座を実施し、ともに模索していくなかで、こうした講座をより豊かな内実にしていくためのスタッフの力量の質と、その力量形成の方法を究明していくことも、本研究の主要なねらいとされた。

第二に、学領域横断的な取り組みである点である。本調査研究は、成人教育学と臨床心理学の双方からの相乗りによるチーム構成で取り組まれた。こうした、これまで混ざり合う機会の乏しい学問分野が建設的に議論をかさね、分野の壁を越えて通用する知の整理を達成するためには、具体的なワークを一緒にこなし、それによってみえてきた同じ事

実を共有し、協議するという、手触り感のある作業こそが有効であると考え、このたびの計画に至っている。

４．研究成果

（１）書き残すことへの躊躇と書き残したい思いとのジレンマにむきあう

いかに生きてきたかを語り合う場を地域で。社会教育施設がそうした場となることに貢献したい、との思いからのスタートしたこの取り組みであるが、事業の試行的実施は、そうした取り組みを実現させていくことの意味の大きさに加え、それを誘うことの困難の所在も様々に学んだ取り組みとなった。

研究期間内に取り組まれた実践の成果は、受講生の記録集『臥竜梅 第２号』(2011 年９月)、『臥竜梅 第３号』(2012 年３月)、そして、『福寿草』2013 年３月）として発刊しており、詳しくはこれらをご参照いただきたい。ここでは、講座で「人生を語る」ことを誘う上で、最も重要なポイントであると思われる、「語ることへの躊躇」について指摘しておきたい。

本研究の準備段階にあたる 2009 年度の第１回の講座受講者は、公募ではなく、講座を実施した社会教育施設職員が、仕事を通して知り合ってきた方々のなかでも特に「この人の話が聞きたい」と思う人たちを口説き、集まっていただいた。そこで、講座開始とともに私たちが直面したのは、集まった皆さんの、あまりにも強い「語る」ことへの躊躇であった。そして、それを少しずつ越えたところに現れてきた生々しい戦前・戦中体験、子どもの時に語っていた方言、その時期に形づくられた価値観、その価値観で戦後社会を生きるうえでの葛藤、自分より先に亡くなった同時代者への思い、などなど。

そこから私たちが気づかされたこと、それは、人は、生きてきた過程で、抑えきれないほどの悲しみ、許しきれない憎しみ、果たせなかった無念、拭い去ることのできない後悔など、あきらめねばならないけれどあきらめきれない思いを幾重にも積み重ねながら生きてきており、そうしたなかで、過去とは一定の距離を保ちながら、自分の今の存在に意味を見いだしながら生きている、ということであった。受講者の皆さんの、地域への貢献をライフワークに組み込んだ今の生き方は、そうしたそれぞれの辿ってきた道のりを受け入れながらも（受け入れきれないながらも）、美しく生きる、正気を保ちながら生きるための工夫であって、道徳心とか公益心、郷土愛といった言葉のみでは説明しきれない、深く重たい境涯からの行動である、ということに気づかされた初年度であった。

こうした経験を経て 2010 年度には、初年度とは異なり、公募で受講生を募った。しかし、にもかかわらず、自らを人前で語ることにはやはり大きな躊躇を抱きながら参加された方が少なからずおられた。

それが、回を重ねるなかで明らかになってきたのは、それぞれが、自らを人前で語ることには強い抵抗がありながらも、それでも書き残したいことがあるという、切実な思いを抱えてここに来られていた、ということだった。

講座実施においては、そうした語りにくさを、「なぜそれが語りにくいか」がまだ明らかになっていない段階であっても、きちんと理解し配慮し、そうした思いを越えて語られ始めた言葉に、ファシリテーターのみならず、受講者相互でそれぞれが敬意を払える、そうした構えをいかに創り出すかが最も重要なポイントといえる。

ところで、2011 年度実施の講座では、「こうした、それぞれのパーソナルな経験や感情を書き残す上で、“史”というスタイルにこだわる必要はないのでは」という発案があり、本講座は、この年度の途中から、名称の自分「史」は、自分「誌」へ変更された。文章のスタイルは史的な記述でなくてかまわない。ある時期の断片でかまわない、事実の整理ではなく、「そのとき自分はこう思っていた」という心模様の記録でもかまわない、ということになった。そのことにより、各人が描く文体は多彩となり、その一方で、「なぜ、そのことを書き残すのか」、その切実な事情と思いが深く練り込まれた内容に仕上げられるようになっていった。

（２）「学び手から伝え手へ」へのいざないへのチャレンジへ

3 年にわたる地域社会教育施設での経験を踏まえ、最終年度にあたる 2012 年度には、場所と対象を変更し、東北大学加齢医学研究所スマート・エイジング国際共同研究センターが開始した「スマート・エイジング・カレッジ」の初年度において、受講生有志のゼミナール（「学び手から伝え手へ」ゼミ）として取り組まれた。

内容は、「いま語りたいこと」をそれぞれが披露しあい、その言葉を互いに鍛えあう、というこれまで試行してきた方法を踏襲しつつ、このたびは、ゼミの成果をカレッジ修了式に講義として披露することに加え、カレッジ同期生を読み手にすえた講義集を刊行することをゴールにすえた。

つまり、これまでの我々の取り組みでは、成果を「誰にどう伝えるか」はあくまで学習者に委ねられていたのに対し、このたび

は、「伝え手」としての役割を果たすことが目標にすえ、学習が取り組まれた点に特色がある。

近年、社会教育・生涯学習事業においては「学習者が学びの成果をいかに社会還元するか」が強く求められながらも、実際の事業の質は、意識の啓発にとどまったり、学習提供者側が想定した「社会還元」への誘導になりがちななかにあって、ここで取り組まれた「学び手から伝え手へ」という筋道の学習事業としての探求は、ほぼ未開拓のままにあり、そのことへのチャレンジに至れた点が、本研究の最も重要な成果といえる。

なお、ここまで試行してきた学習方法は、2013 年度山形県社会教育関係職員研修などに導入予定となっている。

当初予定されていた、異なる社会状況（中国・韓国）におけるライフレビュー学習の実施と，その語りの比較分析については、国際情勢不安のため実施に至れず、各国関係者との協議にとどまった。今後の課題として残されている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

①石井山竜平、自治体構造改革下の地域生涯学習計画の展望、『月刊社会教育』(国土社)、査読無、54-57 巻、PP.4～11、2011 年

〔学会発表〕（計 4 件）

①石井山竜平、「高齢者を対象とした『ライフレビュー』講座の取り組み」（高齢者講座の方法論の検討）、日本学習社会学会第 10 回大会、2013 年 9 月 1 日、関西大学、発表確定

②松本大、「ライフストーリーと社会教育」研究に向けて、第 59 回日本社会教育学会、2012 年 10 月 8 日、北海道教育大学釧路校

③松本大、経験継承の成人教育、日本社会教育学会第57回研究大会、2010年9月19日、神戸大学

④松本大、成人教育者のポジショナリティと世代間関係、第 34 回日本社会教育学会東北・北海道地区 6 月集会、2010 年 6 月 30 日、岩手大学

〔図書〕（計 3 件）

① 東北大学加齢医学研究所スマート・エイジング・カレッジ 2012 年度「学び手から伝え手へ」ゼミ『福寿草』（執筆者：石井山竜平、加藤道代ほか、計 15 名）、2013 年、ⅱ～ⅲ

② 仙台ひと・まち交流財団 仙台市片平市民センター『臥竜梅』第 3 号（執筆者：石井山竜平、加藤道代、松本大ほか、計 13 名）、2012 年、ⅱ～ⅳ

③ 仙台ひと・まち交流財団 仙台市片平市民センター『臥竜梅』、第 2 号（執筆者：石井山竜平、加藤道代、松本大ほか、計 12 名）、2011 年、ⅱ～ⅳ

６．研究組織

(1)研究代表者

石井山　竜平（ISHIIYAMA RYUHEI）
東北大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：30304702

(2)研究分担者

加藤　道代（KATO MICHIYO）
東北大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：60312526

細川　彩（HOSOKAWA AYA）
仙台青葉学院短期大学・子ども学科・准教授
研究者番号：00451500

松本　大（MATSUMOTO DAI）
弘前大学・教育学部・講師
研究者番号：50550175

内藤　隆史（NAITO TAKAHUMI）
東北大学・大学院教育学研究科・助教
研究者番号：90322982